- 1 派遣期日 令和4年 8月20日(土)
- 2 派遣先 Zoom ミーティングでのオンライン開催(東洋館出版社)
- 3 研修内容
 - (1) テーマ 本当は楽しい「体育」と「算数」の授業づくり
 - (2) 講師 齋藤直人先生(筑波大学附属小学校体育部)
森本隆史先生(筑波大学附属小学校算数部)
 - (3) 講義 講義1 体育のニガテ克服!得意じゃない子も活躍できる授業づくりのポイント

齋藤先生は授業をつくる時、学力(①知識・技能②思考力等③主体的に学習に取り組む態度)を高めることができるかを1番に考えていました。

そのなかで、簡単で手軽にできるか、児童が楽しそうか、力が付くか、この3つの観点を大切にしていると述べていました。

始めに、簡単で手軽にできるポイントとして、大きな場の設定をしないということを挙げられていました。研究授業の指導案等でよく見る、体育館全体を使用していくつもの跳び箱やマットを準備し、ステージなども活用して習熟度別に活動できるような場の設定や工夫は、とても素晴らしい授業である反面、なかなか準備する時間もとれず、普段の授業で実践することは難しいと述べ、その授業でのゴールに向けた場の設定をつくることを大切にしていました。目が届く範囲や方向を考え、その中で児童の習熟度に合わせた課題を1時間に1つから2つに絞ることで、これが可能になるとのことでした。

次に、児童が楽しく授業に参加できるポイントについてです。まず、声が全員に届いているのか、指示が通っているのか確認することが大切だそうです。具体的な例として、体育の授業の並び方について言及していました。どうしても縦長に並ぶ学校が多いのですが、後ろの方の列の児童は「聞こえていますか?」と聞けば「聞こえています」と答えますが、説明している声は届かないこともあり、何をやっていいかわからないまま授業が始まってしまいます。そうすると、不安な気持ちが大きくなってしまい、授業に楽しんで取り組む事ができなくなってしまうということです。できる範囲で横長に並んだり、指示したことを途中クイズ形式にしたりして、指示が通っているか確認してから始めることで、「楽しそうだな、早くやりたな」と楽しく授業に取り組めると述べていました。

最後に、児童に力を付けさせるための方法として、1時間の授業の中で2教材を取り上げ、2つの運動を行うことを挙げていました。45分間集中するのに難しい児童や、苦手な運動を45分やり続けると嫌になってしまう児童もいます。そのため1時間の中で2つの運動を行うことで、集中して最後まで取り組んだり、前半のマットは苦手だけど後半の跳び箱は楽しからんぼうと考えたり、積極的に授業に取り組む児童が増えることに繋がります。また、1回の時間が短い分、その教材の取り扱う期間は長いので、技能が定着し力が付くとのことでした。

講義 2 算数のニガテ克服！得意じゃない子も活躍できる授業づくりのポイント

森本先生が授業をするときに1番意識してることは、児童から「引き出す」ということでした。それは、児童の考えはもちろん、表現・やる気・本気・分からなさ・関わり合い・優しさ・感動そして笑顔などたくさんのことを指しています。毎回これら全部を引き出すのはもちろん難しいので、何かひとつでも児童から引き出そうと意識して授業を行うことが大切だと述べていました。

そのために大切なのは、児童への言葉かけの言葉選びだと考えていました。例えば、「この人の名前分かった？」と聞くと分かった人が話の中心になります。しかし「この人の名前分からないよね。」と聞くと、分からなくても反応がしやすくなるというのです。自由に意見や考え方をさせたいときは、「難しいから、みんな分からないよね。とっても難しいからきっとできないよね。」といった、少し知的好奇心をもたせるような声かけの方が、児童はやる気になるとのことです。

また、授業技術を増やすことが、児童から引き出せる授業づくりに繋がると考えています。問題の1部を隠したり、わざとずらしたり、簡単すぎるものに置き換えてみたりと、やり方は多くあります。児童と同じ目線で、児童にはどう見えるか、児童はどんな反応をするかなど考えながら、どのやり方でやるのがよいか考えると、さらに効果的になるとのことでした。

講義 3 齋藤直人先生と森本隆史先生による対談

対談の中心の話題は「学び合い」についてでした。お二人が共通して大切だと考えていたのは、児童が「分からないから教えて」と自分から言えることでした。集中して問題を解いているのに、早く終わった児童が「分かる？ 教えようか？」と声をかけることで集中できなかつたり、「本当は自分で解きたかったのに…」とやる気をなくしてしまったりするかもしれないからです。しかし、自分から友達に教えてと言えるためには、クラスの雰囲気がとても大切だとおっしゃっていました。クラスの中が「早く解いたから偉い」「難しい問題を解いたから偉い」という雰囲気では、自分から困っていることを言い出しにくくなってしまいます。しかし今日の課題までをみんなで達成することが目標だ、とクラスの中で共通認識すると、みんなで目標達成しようという意識が生まれるそうです。

では、早く終わった児童はどうするのかというと、自分で広げていくことができると深い学びに繋がっていくとのことでした。難しい問題を解くのは何が違うかということ、話を聞き、自分で数字を変えてみたり、2桁を3桁にしてみたりと、自分で考えてどんどん広げ深めていくことを意味していました。

(4) 感想

今回このような学ぶ機会をいただき、たくさんのごことを得ることができました。普段から授業をしている先生だからこその気付きや、見方は、共感できることが多くありました。場の工夫の仕方や、児童への言葉のかけ方、授業技術を増やすなど、実践できるものは積極的に取り組んでいきたいです。また、得意・不得意はどの教科でもありますが、その中で楽しいと思える瞬間を味わわせてあげることができれば、苦手意識は減るのではないかなと考えました。学んだこと意識して授業をつくっていききたいです。